北海道医報
ISSN 0913-0217　2011.2.1. 第1109号
発行人　北海道医師会長　長瀬　清
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 250円

節風季

医師会活動はボランティアなのか
全ての会員に参加の道を

情報広報部長　山科　賢児

政治は混迷している。もはや自壊しつつあるようにさえ感じる。政党内部の問題の解決にてこずり、政府本来の内政、外交の仕事ができなくなってしまった。マスメディアも傍観者的批判だけで新しい視点で提言をしようとしていない。国民は国のトップとそれを支えるサブリーダーたちがどんなに有能であっても志がひとつでなければ国家が機能しないことに驚き呆れ、リーダーを選び育てる自分の力がいかに未熟であることに落胆せざるを得なくなっている。旧態依然とした価値観、旧式のマネジメントの手法しか持たない人材では現代の組織を経営できない。危機を危機として感じ、斬新な改革をイメージできる執刀医が今の日本には必要なようである。手術となれば回復は遅れるかもしれないが、このまま寝たきりになって最期を迎えるよりはましかもしれない。まだ底力はあるはずである。諦めることはない。

勤務医がどうしたら医師会に関心を持つか、どうしたら医師会に加入し活動に参加するかが日本医師会広報委員会の今期の重要なテーマである。そのために委員会内にワーキンググループが組織されて、日医ニュース、ホームページを媒体にして何らかの結果を出そうと全国の広報委員は知恵を絞っている。そこでの議論では日医執行部からの明確なメッセージと双方向性のコミュニケーションの必要性、医師会に参加しやすい環境作りが指摘されている。

医師会活動に手を染めるきっかけは「医師会の仕事を手伝ってくれないか」と誘われるのが多いのではなかろうか。大概は遠慮したり固辞したりして、医師会活動に参加する会員は決して多くない。医師会活動に興味がない、意味がないという理由もあるが、役員を引き受けない訳の一つに「医師会活動が医師の本業に支障を来たすので」がある。医師会の活動は通常診療時間内であることが多く、本業の診療に支障を来たし患者に迷惑をかけてしまうことになる。それによる経済的損失も大きい。それらの条件が解決されないと医師会活動はできないような雰囲気になっている気がする。

しばしば話題になるが医師会活動はボランティアであろうか。世間一般は医師会をロータリーやライオンズクラブのようなボランティア団体と同様に見ているかもしれない。ボランティアの精神は自発性、社会性・公益性、無償性であり、その本質は「するかしないか」が自由なところにある。そういう意味では医師会活動は任意でありボランティアとも言える。だが実際に医師会活動をしている役員に「医師会活動はボランティアですか」と尋ねたらどうだろうか。はたから観察していると、ボランティア以上の活動をしているように思われる。時間を何とかやり繰りし豊富な経験、人脈を駆使して、本業の診療と医師会活動を何とか両立させて医師会に貢献している役員が目につく。医師会の行事、業務はおおむね決まっているが、医療情勢を考えると今後の活動内容は変化し、状況は厳しくなり、役員は忙しくなる一方であろう。そうなると新しい感性、手法も必要となり、多種多様な人材が要求されるのではないだろうか。しかし医師会活動のハードさを考えると、特に勤務医、開業年数の少ない医師にとって本業をおろそかにしてまで精力を傾けるにはリスクが大きすぎ、医師会活動への参加を一層躊躇する恐れが出てくる心配がある。

それを回避する一つの方法として、医師会が活動の時間的融通とそれに見合う対価の保証などの諸条件を整備し、今まで以上に全ての会員に医師会活動への門戸を開いてはどうだろうか。なるべく多くの会員が出席できる時間、例えば診療時間後や週末に会議を設定し、それ相応の対価を保証すれば日常診療への負担は少なくなる。テレビ会議、ウェブ会議を使えば時間の無駄も防げる。他にもさまざまな有効な方法があるかもしれない。会員目線から工夫をすれば多くの会員が医師会活動へ関心を持ち参加が可能となり、臨床現場、若い世代の声が医師会に伝わるようになるのではないだろうか。

本来の医師会の活動はボランティア精神を持ってするのが理想かもしれない。しかしボランティア感覚では義務と責任が明確でなくなり、医師会の経営が放漫化し、機能しなくなる危険性がない訳ではない。医師会は非営利法人だからこそ営利企業以上に業務内容の適正化、人事のオープン化、会計の明朗化には大いに注意を払わなければならない。会員への要望はメッセージとしてしっかり発信し、会員が自主性を持って医師会活動をできる環境、機会を作るのが医師会の務めであろう。そして医師会が自ら変わるという姿勢を示すのが、会員に関心を持ってもらい医師会活動への参加を促すための一番効果的な広報活動と考える。